SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

学校生活への適応に課題を抱えた中学1年生への支援過程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 公開日: 2013-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城島, 雅美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007243

学校生活への適応に課題を抱えた中学１年生への支援過程

宮　城　島　雅　美

１、はじめに

「小学校６年生と中学校１年生の間には、大きな壁がある。」という言葉を、しばしば耳にする。環境が大きく変わることで、学校・学級内において不安を覚える子どもは少なくない。近年、小学校から中学校の接続に困難を抱えるという事例が増大し、急速にその問題が取り上げられつつある。「中１ギャップ」と呼ばれるこの問題は、いまや日本中のあらゆる学校で普通に起こっている事象となっている。こうした状況の広がりについては、各種の調査結果などを見ても図り知ることができる（文科省調査 2010）。これらの状況を踏まえ、文部科学省は平成１８年度より小・中連携を研究概要とする研究開発学校を指定し、９年間を見通した教育課程や指導のあり方についての検討を進めてきた。制度としてこれらを導入する学校は、年々増加している。

しかし、新生活への適応に困難を示す子どもがいる一方で、中学校進学が一種のきっかけとなり、大きな飛躍・成長を遂げる子どもたちもいる。数々の学校を訪問する中で、小学校６年生と小学校５年生の顔つきはそれほど変わらないのに対して、小学校６年生と中学校１年生の顔つきでは大きな違いがあったことが、驚きと同時に不思議であった。たった１年の差であるのに、中学校１年生の子どもたちが見せる表情は実に大人びており、日々の行動も周りを意識していることがとても多かった。このような子どもたちの様子を何度も目の当たりにする中で、小学校６年生から中学校１年生の間の１年に何が起こっているのか、子どもたちをこのように変化させる要因は何であるのか、探りたいと考えるようになっていった。

２、子どもたちに影響を与える要因

子どもたちに影響を与える外的要因の１つとして、学校環境の変化が挙げられる。小学校と中学校では学校の校風に大きな違いが見られるし、教育課程や１年間の流れも違ってくる。また教科担任制へ移行することもあり、小学校に比べ教師と生徒が一緒に勉強したり、活動したりできる時間は少なくなる。そのため、子どもたちの中には小学校に比べて、教師との距離が遠くなったと感じる者も多いだろう。

学校環境のような外部からの刺激も子どもたちを変える要因となるが、子どもたちの内なる変化もまた大きな影響を与えていると思われる。身体と心の成長に伴って、子どもたちは長く不安定な時期に突入し、その迷いや葛藤の中で中学校生活を送っている。また、中学校進学と同時に全く知らない同級生が学級内に半分近くいる場合が多く、小学校６年間で築き上げた人間関係をいったん崩して再び築き直さなくてはならない。

このような状況にも配慮しつつ、支援を進めていくことが教師には求められている。

３、学習に困難を抱えた生徒への支援

小学校からの行動観察記録があり、中学校で学習に困難を抱えていると思われた男子Ｉを抽出し支援を行った。行動観察記録を表にまとめ、男子Ｉの実態を把握するとともに、彼が抱える困難を詳細に分析し、支援の手立てを考えた。また、彼と同じような困難を抱えている生徒へも、似たような支援を行うことで一般化への可能性について検討した。

男子Ｉが抱えている困難は、大きく分けて３点挙げられる。１点目は、「書く力」の弱さである。小学校時にノートを取ることが滅多になく、書く文字は平仮名やカタカナが多かった。中学校に進学してからは小学校時とは違い、先生の指示があればノートを取り出し、黒板の文字をノートに写すことができるようになった。しかし、黒板の文字をノートに写すスピードが他の生徒に比べて遅く、書ききれないことが多い。２点目は、「学習に臨む姿勢」である。小学校時には授業中の離席が多く、また着席していても授業内容と違うことをしていることが多々あった。中学校の進学と共に、授業中の離席や授業内容と違うことをしていることはなくなった。しかし、授業に集中することができず、後ろの席の男子生徒に向かってちょっかいをかけたり、話をしてしまったりなどの行動が見られる。３点目は、「周りとの関係」である。中学校に進学して周りの生徒が自分の内面と向き合う時期に入ったこともあり、男子Ｉの行動が小学校時に比べて許容されなくなっている。これら３点は別々の問題のようにも見えるが、根本でつながっているのではないかと推測した（図１）。授業中にノートを取ることができずにちょっかいをかけたり、ぼーっとしたりしていることから、「できない子」と見られがちである。また本番ではできるのに、普段真剣にやらないことから「やらない子」とも見られてしまっている。それらの見られ方が男子Ｉと周りの生徒との関係に壁を作っているように思われるのである。

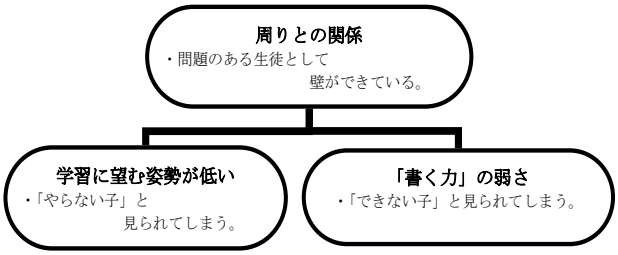

図１　男子Ｉの弱さ・困難の関係

具体的な支援としては、中学校から新しく始まった英語を支援教科とし担当の先生と協力しながら、授業に積極的に参加できるよう声かけや指示の出し方を工夫しながら進めていった。実践前には毎時目標を決め実践後には反省を行い、次に活かすように注意した。

支援実践を通して、机間支援や机間指導の大切さや、授業内で生徒同士が関わる場の必要性などを実感した。授業内で関わることで普段は見えない一面を見ることができ、より深く互いを知ることができる。その積み重ねが、人間関係を築くことにつながっていくのである。そして、生徒の「できること」「できないこと」を正確に把握することが、支援をするにあたり何よりも重要であると感じた。男子Ｉは、できるようになったことを認めてもらえることで、前向きに学習に臨むことができるようになった。

４、人間関係に困難を抱えた生徒への支援

小学校からの行動観察記録があり、中学校で人間関係に困難を抱えていると思われた男子Ｅを抽出し支援を行った。行動観察記録を表にまとめ、男子Ｅの実態を把握するとともに、彼が抱える困難を詳細に分析し支援の手立てを考えた。また、彼と同じような困難を抱えている生徒へも、

似たような支援を行うことで一般化への可能性について検討した。

男子Ｅが抱えている困難は、大きく分けて３点挙げられる。１点目は「場に合わせた行動ができないこと」である。小学校時にも多少見られた行動であるが、ひとり言が多かったり、筋道を立てて説明することができなかったりということがあった。集団行動が求められる中学校において、周りに合わせた行動ができないことは、学級から浮いてしまう原因にもなりかねない。男子Ｅも、他の生徒から変な眼で見られることが多くなり、友達との良好な関係を築いていく上で大きな壁となっている。２点目は「周りから認められていないこと」である。小学校時には学級内でのムードメーカーでもあり、他の学級の児童にも進んで働きかけをする児童であった。中学校に進学してからは学級委員に就任し頑張っていたが、その頑張りがなかなか上手に表れず、また学級の生徒に伝わっていかない。３点目は「友人との接し方」である。小学校時には友人間のトラブルはなく、男女共に仲良く接していた。しかし、中学校に進学してからは周りの児童の成長も伴い、時として男子Ｅの行動が迷惑な行為として受け止められるようになってきている。男子Ｅの場合、これら３点の弱さや困難が絡み合い、悪循環が生じているのではないかと推測した（図２）。

場に合わない奇異な行動をしてしまうため、他の生徒から変な眼で見られることになる。そのことが、男子Ｅの評価にもつながり、周りから認めてもらえず敬遠される要因となっている。周りから相手にされないことから必要以上に干渉や接触をし、それが原因でうっとうしがられてしまい、ますます孤立してしまっている、と思うのである。

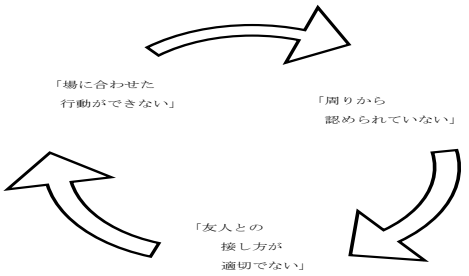

図２　男子Ｅの弱さ・困難の関係

具体的な支援としては、授業以外の時間において友人とうまく関われるよう男子Ｅへの声かけを行った。同時に、学級内での評価が高まるよう学級担任や特別支援コーディネーターと連携するよう努めた。

支援実践を通して、学級担任の果たす役割の大きさや、手立てを継続していくことの必要性などを実感した。声かけは即時的に行うと効果的であり時間が経ってしまってからでは、その時の状況を忘れてしまっていることもあり、あまり意味がなかった。またこの支援では、授業以外の場というものも大切で、体育祭などの行事をうまく活用していくと良い。そして、支援生徒だけでなく周りの生徒へも働きかけていくことが、支援をするにあたり何よりも重要であると感じた。男子Ｅは同じ学級の発言力のある男子とつながることで、学級内での居場所を得ることができた。

５、実践の中から見えてきたもの

小学校６年生・中学１年生と２年間に渡って、子どもたちの成長を見ることができたことは、とても大きな経験になった。子どもたちには小学校という土台があり、その上に中学校での学びが続いていく。この土台には個人差があり、それが長所や短所、得意や苦手を作っていることを学んだ。中学校教育において小学校からの情報は、生徒の土台をしっかり把握する上で重要となり、支援の手立ても考えやすく「中１ギャップ」に陥る危険性も回避できると思われる。そこで、

支援計画を立てるにあたり小学校時のどの情報を活用したのか、また生徒のどのような情報があればより効果のある支援が可能かを検討した。中学校教育では６点の情報が特に有効となると考え、それらを学習面・生活面に分類していった。また、学校現場で気軽に利用できるように「情報共有シート」を作成した。ただし、この「情報共有シート」は、本研究での抽出生徒である男子Ｉと男子Ｅの支援経験という一事例から見えたものであり、今後も支援経験を積み重ねながら、情報の妥当性や有用性を検討することが必要である。

学習面で重要となる情報の１点目は、「できること・できないことは何か」である。小学校時での「できること・できないこと」を知ることによって、生徒１人ひとりの成長を認めてあげることが可能となる。同時に、小学校から中学校への学びにつながりを持たせることもできる。２点目は、「苦手な教科と好きな教科は何か」である。苦手教科を知ることで基礎知識の有無が、好きな教科を把握することで活躍の場を設けるなどの支援を行い、学ぶ意識の向上につなげることができる。３点目は、「提出物は出せていたのか」である。中学校では提出物が多く、また評価の基準としても用いられているので、出せていなかった生徒をあらかじめ気にかけることができる。また、提出物の状況を把握することで、家庭学習や生活習慣が身についているのかを推測することができる。

生活面で重要となる情報の１点目は、「友人との関係」である。子どもたちが６年間かけて築き上げてきた友人関係というのは、想像以上に大きいものである。この人間関係を心の拠り所としている生徒は多く、支援もこのつながりを利用すると効果があると思われる。２点目は、「どのような役割を担っていたか」である。中学校で人間関係に困難を抱える生徒の中には、小学校時に周りの児童を引っ張る役割を果たしていた生徒もいた。中学校に進学して思春期を迎え心身が成長していく中で、今まで許せていた言動に反感を抱いてしまうことが増加する。小学校時に周りの児童を引っ張っていた経験がある生徒の中には、その経験を基に行動をしてしまい、周りとうまくいかなくなってしまうこともある。そのため、中学校前期に学級委員になった生徒や学級の中で発言力が強い生徒には、特にその言動などに配慮や支援が必要になってくると思われる。３点目は、「行動に特性があるか」である。小学校時に周りに合わせられなかったり、少し変わった行動があったりした生徒は、中学校では浮いてしまうことが多かった。中学校では特に全体行動が重要視されるので、注意とともに支援が必要になる。

また、共通して必要な情報として「小学校では、どのような支援をしてきたか」及び「情報の扱い方」の２点が重要だと考えた。問題を抱える生徒に対しては、小学校でも様々な支援が行われているので、その情報を共有することでより早い支援に繋げることができる。また、小学校からの情報は生徒の支援時のみに活用するということを、中学校のすべての先生が認知していくことが大切である。小学校からの情報を悪い方向に受け止めるのではなく、良い方向に活かしていく姿勢が大切である。

６、まとめ

本研究において、小学校からの情報が生徒理解・支援に大きな役割を果たすことが分かった。作成した「情報共有シート」がどの程度の効果があるのか検証していくとともに、今後さらなる改良を重ね、小学校と中学校をどうつなげていくのか模索していきたい。